第一席

美しさは心馳せ

鶴見大学附属高等学校２年（神奈川県）
西村 奈波

「自分を美しく見せなさい」――私はその言葉が好きではなかった。

雨のそぼ降る６月、３年生の先輩方が引退され、私たちは最高学年となった。これからは自分が後輩の手本とならなくてはいけないと、雨音も遠くなるほどに気負い立った。でも、不安もあった。私の学校は中高一貫校なので、私よりも茶道歴の長い後輩もいる。どんなに完璧にお点前を覚えても、どんなに練習を重ねても、彼女のようなお点前はできない。いつか、後輩よりも稚拙なお点前だ、と笑われるのではないか。そんな焦りが、じわりと私を蝕むのだ。

その杞人の憂ゆえなのか。それとも、人間は中身が大切だなどという一人よがりな考えのせいなのか。「自分を美しく見せなさい」という先生の言葉を、私は諒とすることができなかった。そんなことよりも、お点前を、間違えずにやり遂げることの方が、ずっと有意義な気がした。自分を美しく見やるなんて「きれいだと思われたい」という自己中心的な欲求の表れなのではないかとさえ思った、その時は。７月になると長期休みに入り、部活の回数もぐんと減った。でも後輩のお点前は、稽古が減ったのにも関わらず、すばらしかった。焦りのせいか、今月に入って一層上がった気温のせいか、背中に汗が流れた。そんな折、後輩のお点前を正客の席で見ることになった。ゆったりとした足どりや、弧を描くようになめらかに動く柄杓。小さな動作の一つ一つが完璧だった。いや、美しかった。そう、まさに「美しい」という言葉がぴったりだ。見ているこっちが心地よくなってくる。そんなお点前だった。その時聞こえてきた先生の言葉に私ははっとした。「心をこめて点てればお茶はお美味くなる」。私に向けた言葉ではなかったが、私に必要な言葉だったと思う。その言葉のおかげで気づいた。茶道とは心遣いだ。所作のそれぞれに、お客さまを思う心が込められている。自分を美しく見せるのは、自分のためではなく、お客さまに心地よくお茶を召し上がっていただくためなのだ。

おもむろにお湯を汲むその動作が心地よい。蓋置に柄杓を置く音も、お茶を点てる音も心地よい。日の光が障子越しに照らす明るい部屋で、私のために心をつくして点てられたお茶は、言いようがないほど、お美味しかった。